

# 言語学習における文化教育 —外国語として韓国語を学ぶ日本人学習者を中心に—

金 泰 虎

キーワード (Key Words) : 言語学習、文化教育、韓国語学習者、言語文化、一般文化

## はじめに

グローバル (Global) 化時代の到来に伴い、人々が国境を越えて諸外国との交流を深める中、外国語の習得というのは、この時代を生きる上で1つの重要なポイント (Point) になってきている。

本稿では、外国語として韓国語を学ぶ日本人を、その対象にして韓国語学習における文化教育の実施に伴う教師の役割及びどんな形で文化教育を行うのが良いか、またその教育内容について考察する。ここでは、言語学習における文化教育という大枠の中で教師の役割、カリキュラム (Curriculum) と文化教育の具体的内容、その実践に着目して論を進める。

今日、日本人にとって円の国際的価値や日韓の政治動向という変数はあるが、韓国に渡航する移動そのものは日本国内並みに簡単である。観光、仕事、留学といった渡航の目的に関する詳細は別にして、韓国に渡航することの裏を返せば韓国文化に触れ、異文化理解の一步を歩きだすことになる。渡航先の韓国で言葉は通じても韓国文化がわからないと、場合によっては相手の誤解を招いたりすることも生じ得る。これは言語学習における文化教育の重要性を物語ることであり、言語と文化の相関関係を示すことでもある。要するに、韓国に限らず諸外国への渡航にも該当国家の言語駆使だけではなく、文化の理解が求められよう。

従来、言語学習において教師の役割には学習者に言語を習得させることだけが、重んじられてきたと言って過言ではない。しかし本稿では、教師のその役割に加えて、言語学習の中で言語の教師が学習者の母国語で文化教育までを担うという視点から述べるが、これまでこの観点の研究はほとんどない<sup>(1)</sup>。そこで実際、文化教育においても教師の果たす役割は大きい。

ところで、グローバル化時代以前、言語学習と文化教育という2つのことは、前者が重んじられ、後者はそれほど重点をおかない傾向にあったと言える。それはグローバル化時代到来の以前は東西陣営の激しいイデオロギー (Ideology) の対立もあり、個々人の海外旅行、そして自己実現や趣味の一環として海外へ渡航計画を立てても簡単には国境を越え

られない制約があったためと考える。今の時代のように自由に国境を越えることが難しかった時代背景が文化教育の手薄さに繋がる要因だったのである。今日は文化教育の重要性が増し、その教育を施すようになっているが、以前の時代の名残、実施の難しさもあり、目を見張る教育の実施までには至っていないと言えよう。

言語学習と文化教育（紹介）の関わりは、とりわけ韓国語学習に限ってみると、概ね3つに分けて考えることができよう。その一つ目は、言語教育を担う教師が授業の中で学習者のやる気を導きだすため、動機付けの一環として断片的に文化を紹介する。つまり、言語学習だけでは学習者の反応が良くなかつまらないので、学習者のやる気と関心を引き出す狙いでおつまみのように言語学習の中で文化を紹介することである。

二つ目は、言語学習の延長上で言語とは別途の授業科目として文化科目を設け、文化教育を実施することである。これは言語科目と文化科目がそれぞれ独立した科目として成り立つカリキュラムである。

三つ目は、文化の紹介を通して言語学習を促したり、文化に関する関心をもってもらうことである。例えば、韓国ドラマ（Drama）を通じて家族愛や目上の人を重んずる韓国文化に興味を沸き、韓国語を学習するケース（Case）である。いわゆる「韓流ブーム（Boom）」による言語学習である。

本稿では、従来の3つのパターン（Pattern）の文化教育を踏まえて、韓国語を教える教師が文化教育を担当する、それに伴う教師の役割、そして言語学習のカリキュラムの中における文化教育、つまり言語学習と文化教育を同時に実施する観点に基づいて論ずる。そこで文化教育は、さらに大きく言語文化と一般文化に分け、その具体的内容をどんな媒体をもって日本人学者に効果的に教育するのか検討を行う。

このような考察は、日本人の韓国語学習者だけではなく、グローバル化時代における他の諸言語を学習する場においても言語学習と文化教育の新たな地平を開くことになると思われる。

## 第1章 教師と文化教育の実施

### （1）教師と学習者

現在のグローバル化時代は、韓国語を学習するため世界のいろんな地域から韓国にまで足を運んでいる学習者も多い。この場合、学習者が多国籍であるため多様性に満ちており、韓国語の教師は学習者が培ってきたそれぞれの文化の背景を把握するのに難しさが伴う。本稿では、韓国語の教師が文化教育まで担うことが前提であり、その前提のもとで教師の役割を論じていく。

そこで、韓国語の教師はいかなる力量を身に付け、どんな役割を果たすのが望ましいのか、教師のモデル（Model）について、次の（表1）のように示すことにしたい。

(表1) 韓国語を教育する教師の役割

項目	韓国語教師の役割	備考
教育の基本事項	①言語学 ②教授法 ③韓国文化	韓国語の言語学的實力 学習者が能動的に参加する授業 言語文化及び一般文化の素養
担当クラスでの事項	㊦学習者個々人の把握 ㊦学習者出身国家の文化 ㊦学習者の母国語	個々人の学習態度や個性まで把握 学習者の言語文化及び一般文化を把握 韓国文化や韓国語を効果的に伝達

韓国語の教師は、(表1)で示している基本事項の①言語学、つまり学習者の目標言語である韓国語の言語学的實力を身につけることである。その言語学的實力をもとにして、学習者が授業に積極的に加わる、②教授法を展開する<sup>(2)</sup>。この①②は基本的に言語の教師に求められていることである。

しかし、本稿では①②に加えて韓国語の教師に③韓国文化も教育できる知識を備えることを求める。これは韓国語の教師が文化教育までをも行う想定であり、詳細な教育内容については後述する。

次に教師の担当クラス(Class)での事項は、㊦学習者個々人の正確な把握である<sup>(3)</sup>。一般的に日本人学習者の特徴は、はっきりとした意見を示さず反応も見せない傾向にある。そこで韓国語教師は、この日本人の「謹む文化」を知った上で、教育を行う必要がある。つまり、日本では出しゃばらずに静かで、自分の意見をあまり言わず、即答をしないことが多い。その意味で日本人学習者は他国の学習者に比べて、その個々人の把握や理解に難しさが伴うが、学習者を取り巻く日本の総体的文化の把握は欠かせない。

そして、韓国語の教師は㊦学習者出身国家の文化と韓国文化との相違点を知っておく必要がある。日本人学習者だけに限ることではないが、学習者は一般的に自文化と他文化における相違点に興味を示す傾向が強い。例えば、日本人学習者は韓国人がジャポニカ(Japonica)米を食べることには関心を示さない。これは日韓が同じ食文化だからである。しかし、同じジャポニカ米を食べていても韓国人が茶碗とお碗を食卓に置いたまま食べる作法には興味をもつ。なぜなら、茶碗とお碗を手にとって食べる日本人の食事作法と茶碗とお碗を食卓に置いたまま食べる韓国人の食事作法が異なるためである<sup>(4)</sup>。つまり、学習者はカルチャーショック(Culture Shock)に当たるような事柄によく反応をする。このことから、文化教育は日常生活の中で学習者がよく接し、カルチャーショックを受けやすい韓国文化を中心に展開していくのが、効果的であろう。

ところで、韓国語の教師に㊦学習者の母国語の駆使を求めるのは、学習者の韓国語レベル(Level)が低い段階を想定したためである。言語能力のレベルが低いクラスは1つの言語圏(母国語)からなる学習者での編成が必要である。これは韓国語の能力が低い学習者に韓国語で文化の教育をするのは、その効果が期待できず、学習効果を考慮して学習者

の母国語で伝えるためである。但し、学習者の韓国語レベルが高い場合は、韓国文化や学習者の文化を韓国語で説明しても理解することができるので、1つのクラスに1つの言語圏の学生を集めて教育するという事に拘る必要はない。学習者の韓国語駆使の水準が高くなると、教師が学習者の母国語を駆使する必要性は低くなり、複数の言語圏からの学習者クラスに転換することもできる。しかし、複数の言語圏からのクラスを指導する韓国語の教師は、韓国文化や多文化理解、その教育ができる素養が求められる。ちなみに、韓国語の教育にもヨーロッパ (Europe) が提示しているような共通のレベル分けを取り入れる必要があろう<sup>(5)</sup>。ところで、㊦㊧は従来の韓国語教育においては、教師に強く求められたことではない。

このように、韓国語教師は、まず韓国語や教授法をもって学習の現場で適応しないといけない。なお、教師は韓国文化を教えるにあたって、学習者が身につけてきた文化を理解し、把握するのが先決課題である。つまり、教師は韓国文化を熟知していて、さらに学習者の文化までも知るなど、その果たす役割は大きい。

## (2) 文化教育の実施方法

文化教育は、言語教育を担当する教師が行うことを中心に述べてきたが、次に言語学習において文化教育の実施時期、そして実施方法について考察を行う。すでに触れたように文化は、さらに言語と関わる文化の「言語文化」、そして言語とはあまり関係のない「一般文化」の2つの領域に分けて論じて行くことにする。

学習者が1つの言語圏からのクラスで学習者の母国語で文化の説明を行う場合、言語レベルと文化教育の実施する時期は特段に考慮することはなく、いつでも行うことが可能である。学習者の母国語で韓国の文化に関する教育を行えば、学習者の韓国語の駆使能力に関わらず、学習者の理解が得られる。例えば、日本人学習者の場合、日本語の駆使ができる韓国語の教師が必要になる。なぜなら、入門したばかりの韓国語の学習者に韓国語で文化の説明を施しても聞き取る能力が低く、その効果が期待しにくいためである。言語学習の中で文化教育を実施するという前提の上で、日本人学習者への文化教育に当たる韓国語の教師には韓国文化に関する知識、かつ日本文化の知識、そして日本語の駆使が求められる。

そこで、韓国語学習における文化教育とカリキュラムを考慮し、その実施方法について具体的に検討を加える。

基本的に言語学習とその教育は、4技能（話す・聞く・読む・書く）に基づいている。しかし、技能別学習は教育を実施する機関のカリキュラムによって異なる。つまり、4技能を1つにまとめて韓国語という1科目として教育したり、また「話す・聞く」の2技能は会話、「読む・書く」の2技能は読解という科目として位置付けて教育を行ったりもする。一方、各技能別に1つずつの話す（会話）、聞く（聞き取り）、読む（読解）、書く（作文）という4つの科目に分けて教育をするケースもあるなど、その形態は様々である。

いずれにせよ、これらの4技能を意識した韓国語科目の配置の中で、文化教育を行うことが望ましい。なぜなら、言語学習と文化教育を同時に実施しない場合、学習者の言語と文化の知識が一体化せず両者の学習効果も低い。つまり、韓国語学習用テキスト (Text) の中で文化教育を実施したほうが言語と文化との間で相乗効果が現れ、言語学習と文化教育は実を結ぶのである。

## 第2章 言語文化の教育

### (1) 日韓言語文化の特徴

日本人学習者には、韓国語学習にあたって日本語と韓国語は語順、漢字語などが酷似している特徴について、第一に踏まえておくべき言語文化である。以下では、日本語と韓国語の文章を対比しながら、その特徴について述べよう<sup>(6)</sup>。

韓国を 理解する ためには、韓国語を 知る ことが 優先課題だ。  
한국을 이해하기 위해서는, 한국어를 아는 것이 우선과제다.

日本語のアンダーライン (Under Line) をつけた漢字語の部分、□をつけた助詞・上点を打った動詞の部分、それぞれ同じ印をつけた韓国語の部分と対応している。その類似性は品詞までも現れるが、日本語における形容詞と形容動詞に対して、韓国語では両者を形容詞として包括する相違点はある。

そして、韓国語と日本語の敬語の分類に多様性はあるが、その中でも韓国語は丁寧語、謙譲語、尊敬語、日本語は丁寧語、謙譲語、尊敬語に美化語という分け方がある<sup>(7)</sup>。要するに、この分類は日本語と韓国語の敬語において美化語以外は合致しているということになるが、最近の研究では韓国語にも美化語の要素が存在するとの見解が出されている<sup>(8)</sup>。但し、日本語と韓国語では尊敬語であっても、用いる際の基準が異なる、つまり日本語は相対敬語、韓国語は絶対敬語である。次の例文から、その用いる際の相違について確認しよう。ここでは、子供が親の友人からの電話に対応する時の会話であるが、両敬語の用いる場面の相違を確認することができる<sup>(9)</sup>。

韓国語: 지금 아버지는 집에 안 계십니다 (今、お父さんは家にいらっしゃいません)

日本語: 今、父は家におりません。

韓国語における尊敬語の使用は「話題の人が自分より目上かどうか」、日本語は「話者と聞き手、話題となる人物が身内かどうか」が第1判断基準となる。韓国語の絶対敬語では子供にとって父は目上であるため尊敬語を使い、日本語の相対敬語では子供にとって父は身内であるため尊敬語は用いないのである。



一方、韓国語ではバッチム（받침）が多く、さらにそのバッチムが後続する初声と融合して発音の変化を起こすため、日本人の韓国語学習者には発音の学習に難しさが伴う。なお、韓国語の平音は日本語の清音と濁音の間の音であるため、日本人の韓国語学習者は発音しにくい難しさも存在する。

以上のように、日本語と韓国語の言語文化に多少の相違点は存在しているが、概ね類似性の多い特徴を持っているため、日本人学習者にとって韓国語は学びやすい言語である。

## （2）言い回し

韓国語と日本語の類似性はあるが、言い回しの言語文化においては、異なる点も多い。この相違点の理解ができないと、日本人と韓国人の間で互いに誤解が生じることもある。以下の（表2）は、日常生活の会話の中でよく接し得る内容で、誤用の場合は誤解を招く恐れがあるため、提示して説明を行うのが良いだろう。

（表2）韓国語と日本語における言い回し文化の比較

番号	韓国語	日本語	備考
（一）	연세가 어떻게 되세요?	お幾つですか	言葉使いの上下関係
（二）	자녀는 몇입니까?	子供は何人ですか	親しみの現れ
（三）	잘 먹겠습니다.	頂きます	食事代を払いません
（四）	똑바로 가면 나와요.	真っすぐ行けば見えます	正確ではない教え方
（五）	- 하겠습니다.	- したいと思います	日本語は婉曲的表現
（六）	비가 오니까 찌짐을 먹고 싶네.	雨が降るのでチヂミを食べたいわ	前近代の知識が必要
（七）	언제 같이 식사라도 하시죠.	いつか一緒に食事でもしましょう	次回の食事の期待

（表2）の（一）でみるように、韓国人は初対面でも年齢を聞く場合がある。例えば、韓国語学習用のテキストでも「연세가 어떻게 되세요?」（お幾つですか）という項目を設けていることが多く、日本人学習者にとっては理解しがたい質問と言える。これは韓国の儒教文化、つまり目上と目下の関係を明確にして言葉使いを決めるためである。そこで、相手が年下であるのが明らかであれば、場合によってはぞんざいな言い方をしたりもする<sup>(10)</sup>。

なお、韓国社会では年齢の多寡によって血縁関係の呼称を取り入れることもある。相手が1歳でも上なら「오빠（오빠）」（女性からみて目上の男性）、「온니（언니）」（女性からみて目上の女性）、そして「형（형）」（男性からみて目上の男性）、「누나（누나）」（男性からみて目上の女性）と呼んだりすることが多い<sup>(11)</sup>。

この際、年齢の会話に続けて韓国人は家族関係などの個人的な事柄の質問をすることもしばしばある。例えば、（二）のように「자녀는 몇입니까?」（子供は何人ですか）と聞かれることが多いが、親しみを深めるためであり、基本的に他の意味はないと考えてよい。

ところで、日本人は食べる場面に接し、例えばある家庭に招待された時も、一緒に外食

をする食堂に行った際も、(三)の「頂きます」という言葉をよく発する。この言い方は、韓国では他の家庭に招待された際の表現としては相応しいが、食堂での「잘 먹겠습니다」は「私は食事代を支払いません」という意味になるため、食事代の支払いの主体に関わる問題になる<sup>(12)</sup>。つまり、ご馳走になるのが確実な時、ご馳走になる人だけが言う言葉である。誰が食事代を支払うのか明確ではない状況のもと、食堂で「잘 먹겠습니다」という言い方は誤解を招きかねない。

そして、韓国人に道やある場所を尋ねると、一般的に(四)の「똑바로 가면 나와요」という大まかな返事がよく返ってくる。同じ質問に対して、日本人は一般的に「東の方向に30メートル(Meter)ほど歩くと信号があるが、そこで右に曲がって10メートル位進むと右に見えます」というような、きめ細かな答えをしてくれる。日本のほうが韓国より詳しく丁寧に説明をしてくれるため、韓国人は不親切だという感情を抱く恐れもある。

さらに、ある事柄を片付けないといけない時、韓国人は(五)でみるように「제가 하겠습니다」(私が致します)と断言をする。一方、日本人は「私がしたいと思います」と婉曲に表現をする。日本人にとって韓国人の表現はきつく感じられ、逆に韓国人には日本人の言い回しは歯がゆい言い方と言える。

特に、(六)の「비가 오니까 찌짐을 먹고 싶네」という言い回しは、前近代の農業が基盤であった韓国社会の深い理解が必要である。前近代の農業社会では雨が降る日、つまり農作業を休む日でないと手間暇のかかるチヂミ(찌짐)料理をつくることができなかった。その影響で今も、この言い回しが韓国社会に残っている<sup>(13)</sup>。しかし日本語には、これに該当する言い回し文化はない。

(七)の「언제 같이 식사라도 하시죠」という韓国人の話は、日本人にとっては明確ではないが、食事をする約束の意味として捉える。日本人は、今の時点では明確に場所や日時を決めていないが、その後、連絡を取り合って決めるだろうという期待感をもつ。しかし、話をした韓国人のほとんどは食事をする意図もなければ、連絡もしないのが一般的である。したがって、この言い回しはほとんど軽く流す挨拶程度であって実現しそうな意味合いである。

これらの言語文化に関することは、掘り起こすときりがない。そこで、概ね言語文化は会話(話す・聞く技能)の韓国語学習用テキストに紹介し教育するのが望ましい。なお、教師は学習者の韓国語の水準が高くなるにつれて、さらに複雑な言語文化の教育へ転換していく必要が生じた場合、そのレベルに相応しい会話文を作って補っていく<sup>(14)</sup>。

ところで、言語文化の教育に当たって、学習者は韓国語と日本語の相違点に詳しくないため、その相違点を熟知している教師が主導的に進める。学習者が高いレベルの韓国語駆使能力に達すると、両言語の相違点から韓国語だけにみる言語文化へ展開していくのが望ましい。

### 第3章 一般文化の教育

#### (1) 日韓の衣食住

一般文化の教育では、人の生活の営みの中で欠かせない、またよく接しうる衣食住の文化を中心に教育を行うのが適切であろう。そこで、一般的に学習者は、一般文化の衣食住の中でも学習者の自文化との間で相違点のあることに大きな関心を寄せるため<sup>(15)</sup>、日本人学習者に韓国と日本の相違を対比しながら教育を行う。そこで、学習者の目線に立って学習者がカルチャーショックを受けた、あるいは受けやすい事例を中心に教育を行うのが効果的であると言える。

(表3) 韓日の衣食住の比較

番号	項目	韓国の衣食住	日本の衣食住
A	衣	チマ・バジジョゴリ (치마·바지 저고리)	着物
B		士帽官帯、ジョクドゥリ (족두리)	袴、白無垢・角隠し
C	食	匙と箸	箸
D		茶碗とお椀を食卓において食事	茶碗とお椀を手にとって食事
E		食卓で長老が食べ出してから食べる	食卓で長老の行動は気にしない
F		食べ残す	食べ残さない
G		大皿の料理を直箸で食べる	大皿の料理を小皿に分けて食べる
H		杯の注ぎ足しをしない	杯の注ぎ足しをする
I		キムチ (김치)	漬物
J	住	オンドル (온돌)	畳
K		マンション暮らしの傾向が強い	一軒家暮らしの傾向が強い
L		チムジルバン (찜질방)	温泉風呂
M		自炊	下宿

(表3)の衣食住に関する諸項目は、韓国文化の理解のため、日本人学習者にとっては欠かせない知識で、授業中に踏まえたほうが良いと考える<sup>(16)</sup>。ここでは、補足の説明が必要と考えられるC～Mを取り上げることにする。

次の文章からは、C・Dに関する文化を教育することができる<sup>(17)</sup>。

한국의 식탁에서는 숟가락과 젓가락을 병용한다. 한편 일본에서는 젓가락만 사용한다. 여기서 한국과 일본의 식사 예절은 다르게 성립되었다. 즉 한국은 밥그릇과 국그릇을 식탁에 놓고 먹는다. 한편 일본은 밥그릇과 국그릇을 손에 들고 먹는다. <하락>

韓国の食卓ではスプーン(匙)と箸を併用する。一方日本では箸だけを使う。ここで韓国と日本の食事の礼節(作法)は異なって成立した。つまり韓国はご飯の器と汁物の器を食卓



において食べる。一方、日本は茶碗とお碗を手にとって食べる<下略>

この引用文からは読解の言語学習だけではなく、日韓の食具、そして食事作法の相違まで学習をすることができる。ひいては日本人学習者にとって、生活の中で生じ得る日韓文化の相違による誤解を払拭させることにも役立つと考える。

韓国では食事の際に箸と匙、日本では箸だけを用いて食事をするため異なる食事作法が成立した<sup>(18)</sup>。つまり、韓国では匙を使っており、液体の料理を食卓に置いたままでも匙ですくって食べられる。したがって、韓国では茶碗とお碗を手にとって食べると「行儀が悪い」と見なされる。しかし、日本では食事に箸だけを用いるため、手にとらないと、ことに液体の料理は飲むことができない。そこで、日本では茶碗とお碗を食卓に置いたまま食べると「犬食い」と言われる。要するに、日韓で用いられている各々の食具は、その機能の短所を克服し、また長所を活かし、合理的に食べる過程で作法が生まれたのである。

Eの韓国の食卓では、長幼の序が強く働いており、年長者が食べ始めてから食べるのが礼儀である。酒を飲む際も目上の人の前では、正面ではなく横を向いて飲む習わしが未だに根強く残っている。

Fは、実に日韓のご馳走の相違から理解すべきである。つまり、韓国では食べ残すほどの多くの量、日本では出された皿の数がご馳走を意味する。韓国では食べ残すのを前提としたもてなし文化である。

Gの大皿と食具には密接な関係がある。すなわち、韓国の食卓では匙を使っているため、大皿に盛っている料理も簡単に食べられる。しかし、日本の食卓では箸しか使わないため、取り皿を用いず口まで食べ物を運ぶ時、途中で落とす可能性が高い。このことから韓国では直匙・直箸、そして日本では直箸をせず、取り箸で取り皿に分けて食べる習慣が形成されたのである<sup>(19)</sup>。

そして、Hの「注ぎ足し」は、日本で酒を飲む際、おちょこやグラス（Glass）に酒が少ししか残っていない状況で当たり前のように行われる行為である。しかし、韓国では「注ぎ足し」は「添盞」と言われ、祭祀のとき、霊魂に対して酒を注ぐ行為なので避ける傾向にある。

Iのキムチ（김치）は韓国料理を連想させる代表的な辛い食べ物として知られているが、その数の多さに加えて、辛くないキムチもある。その辛くないものには水キムチ（물김치）とドンチミ（동치미）が取り上げられる。しかも、韓国ならではの文化であるが、1990年代からキムチだけを保存する「キムチ冷蔵庫」が各家庭に普及している<sup>(20)</sup>。

Jのオンドル（온돌）は、韓国の住宅における暖のとり方であり、簡単に言えば焚口から薪などを燃やして、その火と熱気で暖房をする意味である。今の韓国では、マンション（Mansion）の普及率が高く、伝統的な暖のとり方が大きく変わっている。つまり、Kのマンション暮らしでは、オンドルはマンションという集合住宅の環境に合わせて改良した床暖房である。そして、Lのチムジルバン（찜질방）は、日本の温泉風呂に類似している

が、梯して飲んで遅くなり、帰宅せず雑魚寝することができる簡易宿泊施設のような機能も果たしている。なお、Mの韓国における自炊は、部屋を借りて自分で食事を作って食べる形態を意味する。一方、日本では韓国の自炊の形態を下宿と称する場合もある。

## (2) 生活・礼儀・意識の文化

韓国と日本の主たる生活、礼儀、意識の文化に関する事柄の対比項目を設け、(表4)にまとめて取り上げることにする。

(表4) 韓日の生活・礼儀・意識文化の比較

番号	項目	韓国人の生活・礼儀・意識	日本人の生活・礼儀・意識
(a)	日常の行動	大きい傾向	小さい傾向
(b)	女性の座り方	立膝・あぐら	正座
(c)	女性同士	女性同士が手をつなぐ	女性同士は手をつながない
(d)	意見	意見を強く主張する	意見を強く言わない
(e)	対人関係	自己中心	配慮、迷惑をかけない
(f)	声	声が大きい傾向	声が小さい傾向
(g)	渡す行為	両手	片手
(h)	電車の席	老人に席を譲る傾向	老人に席を譲らない傾向
(i)	プレゼント	高価で立派なものも無警戒	高価で立派なものは警戒

(表4)の諸項目は理解をしておかないと、日常生活の中で誤解を招きやすいため、説明を付け加えることにする。

(a)の日常の行動、つまり電車やバス(Bus)の中で韓国人は行動の幅が大きい、相手に身体がぶつかることが多い。なお、乗り物の中で新聞を読む時も日本人のように肩幅程度の開き方ではなく、それを越える開き方をすることも多く見かける。

(b)であるが、一般的に正座をする日本人女性の価値観からすると、女性の立膝とあぐらは品のない座り方である。しかし、この座り方は韓服という韓国伝統衣装の着用時には欠かせない、つまり座った際に女性の衣装のライン(Line)を美しく際立たせることに適合している<sup>(21)</sup>。

(c)の女性同士が手をつなぎ合うことは、韓国では女性同士における親密さを表す行為として良く見かけられる。一方、日本ではレズビアン(Lesbian)として見なされる傾向が強い。

(d)にみる韓国人は、日本人より意見をはっきり述べ、自己主張も強い傾向がある。そこで、(e)の相手に配慮するよりは自己中心の傾向が現れ、その中で(f)の声も大きくなることに繋がっている。

(g)は、学校などの教室でよく接しうる行為である。例えば、韓国では学習者が先生に課題を渡す時に両手を使う。先生や目上の人に何かを渡す時は、両手で渡すのが常識で

ある。一方、日本では目上や目下に関係なく、ほとんど片手で渡す傾向にある。いわば、韓国人にとって日本人の片手使いは無礼な行動に映りかねない。

(h) は電車、地下鉄、バスに乗った際、遭遇する場面である。韓国では乗り物に「老弱者席」を設け、老人と弱者には席を譲ることになっている。一昔前までは「敬老席」と名付けて老人に対する優先座席にしていた。ところで、韓国ではこの優先座席以外の席までも老人や身体の不自由な人には座席を譲る文化が定着している。稀には乗り物の中で老人が自ら若い人に席を譲るように言い出したり、怒ったりするケースまで見られる。

この (g) (h) の目上や歳をとった人に対する礼儀は、儒教の「長幼有序」、つまり「長幼の序」から生まれてきたものである。韓国では未だに儒教精神が社会の規範として根強く残っており、特に食卓、飲酒の場、日常生活の挨拶などでよく求められる普遍的礼儀である。

(i) の日韓におけるプレゼント (Present) については、例えば旅行帰りのお土産、誰かを訪問する際に手土産を贈る場合がある。普通は日韓ともに菓子などの軽いものを贈るが、韓国人は高価で立派なものを贈る場合もしばしばある。その際、日本人は高価で立派なプレゼントに対しては、その背後にどんな狙いがあるのか警戒を怠らない。

### (3) 制度

社会制度も 1 つの文化と言えるが、日本人学習者が韓国及び日本を支える社会の制度を比較してつぶさに知っておくのも韓国旅行、韓国での暮らし、韓国語を使った仕事などをする上で役に立つ。

以下では、社会の制度や仕来りを整理し、(表 5) でもって提示をする。

(表 5) 韓国と日本の制度

番号	項目	韓国の制度	日本の制度	備考
(I)	政治	大統領制	内閣責任制	日本は立憲君主である天皇が頂点に立つ
(II)	軍隊	国軍 (義務)	自衛隊 (志願)	韓国は男性の全国民に兵役義務を課する
(III)	車	右車線を走行	左車線を走行	韓日は自動車の走る方向が反対
(IV)	施設	自然休養林	国民宿舎・休暇村	国民が休暇を楽しむ施設
(V)	姓	夫婦別姓	夫婦同姓	日本は結婚すれば女性が夫の姓に替える
(VI)	氏名	3 文字の傾向	4 文字の傾向	姓は韓国 1 文字、日本 2 文字の傾向
(VII)	休日	公休日	国民の祝日	韓国はナショナリズム、日本は天皇制が背景
(VIII)	記念日	毎月 14 日	2 月と 3 月の 14 日	韓国は毎月 14 日が記念日

(表 5) の (I) ～ (VI) は、韓国のみならず日本を理解する上でも参考になろう。これらも韓国語を学習する中で教育を行うのが望ましい。(III) ～ (VI) だけを取り上げて説明を加えることにする。

まず、(III) の日本における車の走行車線の方向は韓国と異なる。それは、日本が近代

化を推し進めた開化期に、イギリスの制度を取り入れたためである。実に、植民地支配下では韓国においても日本の主導で開化が進められたので、今の日本と同じシステム(System)だった。しかし解放後、アメリカ(America)の制度を取り入れて車が右車線を走行するようになり、現在に至っている。但し、韓国の列車が走る線路だけは今も日本と同じ方向であるが、これは開化期から植民地支配の間に韓国鉄道を敷設した日本式の痕跡と言える。

次に、(IV)に関わる内容は、韓国語学習用テキストの会話から引用しよう<sup>(22)</sup>。

田中：여보세요? (もしもし)

従業員：네, 자연 휴양림입니다. (はい、自然休養林です)

田中：숙박 예약됩니다까? (宿泊の予約できますか)

従業員：예, 됩니다. (はい、できます)

ここで韓国の「自然休養林」は、日本の「国民宿舎」ないし「休暇村」と類似する宿泊施設である。前者は貸しコテージ(Cottage)のような施設で1軒を借りて基本的に自炊をする。一方、後者は一般的に温泉宿で夕食と朝食の2食が付いている施設である。つまり、両者は滞在の形式が異なる。

そして、(V)の夫婦の姓であるが、韓国の女性は結婚しても夫の姓を名乗ることはなく、結婚前の自分の姓をそのまま使う。反面、日本の女性は一般的に結婚をすると、西洋の仕来りと同様、夫の姓に替え、結婚前の姓を指す場合は「旧姓」と言う。そこで、日本人の夫婦は結果的に同姓同本になるが、韓国では伝統的に同姓同本の家庭は存在せず、同姓同本同士は結婚できないのである。韓国では、2005年の民法改正(第809条)によって、一定の親等を越えると、同姓同本でも法律的には結婚できるようになっている。しかし、未だに一般的な韓国人の意識は、法律と関係なく同姓同本の結婚は避ける。ちなみに、日本では同姓同本の親族でも「直系血族または三親等の傍系血族」以外は結婚ができ、例えばいとこ同士の結婚も可能である<sup>(23)</sup>。

日本では、娘婿の夫が妻の姓にかえることもある。ある家系の姓が途絶えないようにする側面からみると、韓国の養子と類似する役割を果たす。しかし、韓国では結婚を媒介にするのではなく、男系一族の血を引く姓が同じである男ではないと養子にしない「異姓不養」の傾向が強い<sup>(24)</sup>。

(VI)の氏名は、一般的に韓国人は姓の1文字と名前2文字の合計3文字、日本人は姓2文字と名前2文字の合計4文字を使う傾向にある。特に韓国の男の名前には、男系一族の世代別に共通する「行列字(항렬자)」を用いる場合が多い<sup>(25)</sup>。

(VII)の日韓のカレンダー(Calendar)にみる休日は、外見的に日本では主に陽暦、一方、韓国では陽暦に基づきつつも陰暦を使っている。さらに、内面的に日本の休日は天皇制が、その背景に強く影響を与えているが、韓国は伝統的な年中行事の継承や反日的ナ

ショナリズム (Nationalism) が反映されている<sup>(26)</sup>。

(Ⅷ) の日韓社会における認知度の高い記念日として代表的なのは2月14日のバレンタインデー (Valentine's Day) と3月14日のホワイトデー (White Day) である。これらの記念日は日本を経由して韓国にも定着してきているが、グローバル化時代に入って韓国では、従来の記念日をさらに拡大して社会のコンセンサス (Consensus) を得ている。つまり、韓国社会では毎月の14日が記念日である<sup>(27)</sup>。

このように、日本人学習者が一番関心を持ちうる日韓の一般文化に関する個々の事例を取り上げてきた。それは身の回りの日本と韓国の相違点、つまり生活の中でカルチャーショックを受けやすい事例に基づいている。ここでは一般文化の教育であっても会話を活用しているが、概ねは読解 (読む・書く技能) の韓国語学習用テキストの中に紹介をして教育するのが効果的であると言える。なお、上記で羅列してきたこと以外の文化に対する質問、そして教育の必要性が生じた場合は、適切な会話ないし適当な作文を通じて教えられる<sup>(28)</sup>。

そこで、一般文化の教育も言語文化と同じく、韓国語のレベルが低い段階では学習者の文化と韓国文化の相違点から教育をする。しかし、韓国語の能力が高いレベルに達するにつれて、韓国文化だけにみる特徴を教育する方向に展開をしていくのが望ましい。

要するに、その韓国文化教育の方向性は、最初は学習者のカルチャーショックを受けやすい事柄から始めて、次は類似性の中でみられる相違点のこと、ひいては韓国文化ならではの独特な背景にまで深めて行くのが望ましいと考える。例えば、類似性の中でみる相違点は日韓の年中行事、つまり正月とお盆は帰省ラッシュ (Rush)、それに伴う交通渋滞は類似した現象である。しかし、日本における帰省の主たる目的は、日頃、離れて生活していた家族が集い、ともに時間を過ごして融合をはかる里帰りである。一方、韓国での帰省は祖先祀りの「祭祀」がメイン (Main) である<sup>(29)</sup>。

## おわりに

本稿では、外国語として韓国語を学ぶ学習者、特に日本人学習者に、いかに文化教育を行えば良いかについて述べてきた。つまり、言語学習における文化教育という大枠の中で教師の役割に重点を置き、カリキュラムの中で言語とともに文化の具体的内容を教育するという観点に立っている。

従来の言語学習では、文化教育を重視しない傾向が強かったため、言語の教師は主に言語学の知識に基づき、上手に教えられる教授法、そして担当クラスの学習者個々人の把握の力量が重視された。しかし、本稿では従来、言語の教師に課せられた役割に加えて、韓国文化、学習者出身国家の文化、さらには学習者の母国語まで駆使できる韓国語の教師の役割を求めている。

そこで、韓国語の教師に学習者の言語圏の言語 (母国語) の駆使を求めるのは、学習者



の韓国語レベルが低い段階を想定したためである。この言語能力のレベルが低いクラスは、1つの言語圏からなる学習者での編成が必要である。韓国語のレベルが低い学習者に韓国語で文化教育を行うのは、その効果が期待できず、学習者の母国語で伝えるためである。但し、学習者の韓国語レベルが高くなった場合は、韓国文化や学習者の文化を韓国語で説明することができるので、1つのクラスに1つの言語圏からの学生を集めて教育するという事に拘る必要はない。つまり、韓国語の運用能力が上達してからは、韓国語で行う文化教育が理解できるため、複数の言語圏からのクラスでも構わない。しかし、複数の言語圏からのクラスを指導する韓国語教師は、韓国文化及び多文化理解、その教育ができる素養が求められる。

ところで文化教育は、大きく言語文化と一般文化の2つの領域に分けて論じられる。そこで、学習者は一般的に言語文化と一般文化は問わず、自文化と他文化における相違点に興味を示す傾向がある。日本人の韓国語学習者も例外なく日本文化と異なる韓国文化に注目し、関心を寄せる。したがって、韓国語教師は韓国文化及び日本文化の両方を熟知し、日韓文化を対比しつつ、学習者にカルチャーショックを引き起こしやすい事柄を中心に教育するのが望ましい。

この文化教育における言語文化のことは、概ね会話中心の韓国語学習用テキストに掲載して教育するのが望ましい。学習者の韓国語の水準が高くなるにつれて、テキストだけでは補えない複雑な言語文化に関しては、教師がそのレベルに相応しい会話を作って対応する。一方、一般文化は一般的に読解技能の韓国語学習用テキストの中で紹介するのが効果的な教育になる。テキスト以外の文化に対する質問、そして教育の必要性が生じた場合、教師は適当な会話ないし適切な作文を通じて教える。

しかし、韓国語学習用テキストを活用する水準を超える学習者の文化教育には限界がある。したがって、自由会話や討論、そして文献の活用、ひいては文化体験やフィールドワーク(Field Work)を経験させるのは、高いレベルの一番効果的、かつ生きた文化教育と言える。

ちなみに、文化というのはそれぞれの地域における宗教、環境、政策などに適合して根付いているものであるため、異なる環境の文化と比べて、その優劣性を語るのは禁物である。その意味で異文化は、自分の物差しで裁くものではなく、尊重する姿勢を堅持するように指導を行うのが重要である。

以上、論じてきた中で言語学習と文化教育における教師の役割、とりわけ文化教育、つまり言語文化と一般文化の教育に際し、レベルに応じた内容の選定、その配置などの具体的追究は今後の課題である<sup>(30)</sup>。

## 注

- (1) 金重燮『韓国語教育の理解 (한국어 교육의 이해)』(図書出版夏雨、2010年、韓国) 341頁では、韓国語教育における文化教育の先行研究は、教育現場で韓国の文化要素が適切に扱われておらず、学習段階や学習者による内容の選定及び配列に問題があるという研究傾向であると整理している。一方、ハンジェヨン (한재영) 他編『韓国語教授法』(太学社、2005年、韓国) 507～519頁では、文化教育に言語文化と一般文化の教育という区別をせず、初級・中級・高級のレベルに分けて教育内容を設定している。しかし、教師がどんな言葉で教育するのかが曖昧な上、教育内容と学習用テキストとの関連性、そして技能別教育を考慮していない問題点が指摘できよう。教師の伝える言葉が韓国語の場合、韓国語のレベルが低い、つまり初級学習者に韓国語で文化教育を行って、どれくらい理解できるか疑問である。
- (2) 例えば、金泰虎「『韓国語会話』の授業をめぐる1つの試み」(『韓国語教育の理論と実際』白帝社、2006年) が取り上げられる。
- (3) 前掲金重燮『韓国語教育の理解 (한국어 교육의 이해)』412～416頁では、教師の基本的資質及び学習者の把握について取り上げている。なお、405～406頁には言語教師の資格を取得する条件として韓国文化の履修を求めているが、異文化 (学習者の文化) に関する履修項目は設けていない。
- (4) 日韓の食事作法の相違に関する原因については、金泰虎「日韓の食事作法」(『日韓食文化の比較研究』叢書103、甲南大学総合研究所、2008年) を参照されたい。
- (5) 前掲金泰虎『韓国語教育の理論と実際』54頁と59頁では、ヨーロッパにおける複数外国語の学習を促すため「ヨーロッパ協議会」は加盟国における「言語に関する共通フレームワーク (Common European Framework of Reference for Languages)」や「ヨーロッパ言語ポートフォリオ (The European Language Portfolio)」の積極的な導入を目指していることと、そのレベル分けについて記している。
- (6) 金泰虎「韓国語・韓国文化への誘い」(『ゼフィール・にしかぜ』57号、甲南大学国際言語文化センター、2014年)
- (7) 鄭貞美「日本語における接頭辞「御」の付く語彙について—「ミ」の派生の諸側面—」(『東アジア研究』第60号、大阪経済法科大学アジア研究所、2013年)
- (8) 鄭貞美「韓国語に見られる美化語の要素—「말씀」と「藥酒」を中心に—」(『韓国文化研究』第4号、韓国文化学会、2014年) によると、韓国語の「말씀」と「藥酒」という語彙は、美化語の要素をもっているとする。
- (9) 『韓国理解への鍵』(白帝社、2015年) 101頁から引用しているが、白同善「絶対敬語と相対敬語 (절대경어와 상대경어)」(『日本語の待遇表現の研究 (일본어의 대우표현 연구)』ボゴサ (보고사)、2003年、韓国) も合わせて参照されたい。
- (10) 金泰虎「異文化の理解 (韓国・朝鮮)」(『ゼフィール・にしかぜ』23号、甲南大学国際言語文化センター、2002年)
- (11) 金泰虎「韓国語を通してみる韓国社会」(『ゼフィール・にしかぜ』35号、甲南大学国際言語文化センター、2006年)
- (12) 金泰虎「外国語授業における言語と文化の総合的学習 (韓国語)」(『ゼフィール・にしかぜ』32号、甲南大学国際言語文化センター、2005年)
- (13) 詳しくは、金泰虎「言葉にみる韓国文化の一端—雨の日とチヂミ—」(『ゼフィール・にしかぜ』58号、甲南大学国際言語文化センター、2014年)
- (14) 韓国のソウル (서울) に所在するソウル大学校、延世大学校、高麗大学校、西江大学校、成均大学校、漢陽大学校、慶熙大学校などは、独自に韓国語を教育する機関を設け、なお教育用のテキストも出版している。その中で、言語文化を取り上げているテキストはほとんどない。その理由は、比較の対象になる特定の国に特化して作ったテキストではないためと考えられる。ところで、大学ではないが、日本人に特化した教育、そしてテキストを発行している「ガナダ (가나다) 韓国語学院」の教材でも状況は同じである。
- (15) 前掲ハンジェヨン (한재영) 他編『韓国語教授法』517頁では、文化教育における文化に言語文

- 化と一般文化という区別はせず、なお東洋・西洋の学習者も考慮していない。
- (16) 金泰虎「在日韓国人の日本文化への適応と韓民族の正体性」(『韓国文化研究』第5号、韓国文化学会、2015年) 5～7頁も合わせて参照されたい。
  - (17) 前掲『韓国理解への扉』100頁は、2技能(読む・書く)の読解に重点を置いている韓国語学習用のテキストである。
  - (18) 前掲金泰虎「日韓の食事作法」
  - (19) 金泰虎「日韓の食具と食器・膳・料理の関わり―食具の機能からみた考察―」(『北東アジア地域研究』第14号、北東アジア学会、2008年) 84～87頁。
  - (20) 朝倉敏夫『韓国』(農文協、2005年) 100～101頁。
  - (21) 前掲金泰虎「在日韓国人の日本文化への適応と韓民族の正体性」5～7頁。
  - (22) 前掲『韓国理解への鍵』174頁は、2技能(話す・聞く)の会話を中心とする韓国語学習用テキストの一部である。
  - (23) 同姓同本に関しては、金泰虎「日韓社会の人間関係における「兄」について」(『言語と文化』12号、甲南大学国際言語文化センター、2008年) 148～149頁、名字に関しては、金泰虎「日韓の家庭における対面呼称と接尾辞」(『言語と文化』13号、甲南大学国際言語文化センター、2009年) 137頁、そして喜喜澈「氏名」(『現代韓国を知るキーワード77』大修館書店、2002年) 32～35頁を参照されたい。
  - (24) 前掲金泰虎「日韓の家庭における対面呼称と接尾辞」137頁。
  - (25) 『韓国百科(第二版)』(大修館書店、2002年) 87～90頁。
  - (26) 金泰虎「「国民の祝日」と「公休日」を通してみる日韓社会」(『言語と文化』15号、甲南大学国際言語文化センター、2011年) 151～152頁。
  - (27) 金泰虎「日韓社会の「記念日」」(『言語と文化』18号、甲南大学国際言語文化センター、2014年) 147～151頁。
  - (28) 韓国のソウル(서울)に所在する諸大学の韓国語を教育する機関が出版している韓国語学習用テキスト、そして一般の語学塾に当たる「ガナダ(가나다)韓国語学院」の教材に一般文化に関する紹介は散見される。しかし、それらは韓国人の目線による内容と構成であり、学習者の立場、つまり学習者の興味に基づく自文化と他文化(韓国文化)の相違点から徐々に韓国の独特な文化へ展開をしていくのではなく、一方的に教師がテキストに掲載して叩き込むような印象は否めない。それは学習者が1つの国に限定されていない理由が大きいと考えられるが、それにしても取り上げる内容と、その配置は学習者を考慮していないものと言えよう。
  - (29) 金泰虎「韓国の正月―帰省や正月料理の意味合い―」(『教育タイムス』株式会社タイムス、2005年2月11日)
  - (30) 前掲ハンジェヨン(한재영)他編『韓国語教授法』516～519頁では、すでに文化に関する内容をテキストに盛り込んでレベル別に教育する内容の配置で評価はできるが、学習者の目線ではなく、なお言語文化に関する内容が少ない。

## Cultural Education in Language Learning

—Focus on Japanese learners who study Korean as a foreign language—

Kim Tae Ho

### <Abstract>

In this paper, I will focus on the Japanese who studies Korean as a foreign language, and explain the teacher's role in ensuring effective cultural education in language learning.

Because the tendency to value a cultural education was strong in the past to grasp understanding the ability of the individual learner of didactic works was emphasized and taught based on the knowledge of linguistics of the teacher. However, the role of more understanding of Korean culture in addition to the role assumed by the teacher of the language, the learner's own culture, and a Korean teacher who can make good use of the learner's mother tongue is needed.

Making good use of the learner's mother tongue is required from a Korean teacher, especially in the case where the learner's Korean level is in its beginning stages. For beginning levels in which linguistic competence is low, it is important to have classes composed of students from a single country so that they have a shared mother tongue. Teaching the culture to the learner using low level Korean will not be as effective as teaching it in the learner's mother tongue. In the case of a high-level Korean class, multinational is not a problem because the teacher can explain about Korean culture and learner's culture in Korean with a clearer understanding. However, such an outcome can only be attained by a Korean teacher who possesses multi-cultural understanding.

Cultural education can be discussed separately as two distinct areas: linguistic culture and general culture. Linguistic culture and general culture rarely fail to show interesting differences between one culture and another, and to focus attention on parts of the Korean culture that a Japanese Korean learner may find different from Japanese culture. These differences must be acknowledged for both Korean culture and Japanese culture to be well taught. The extensive comparison of the two cultures is the basis for the preferred method of educating.

In regard to learning about the linguistic culture, it is preferable for it to be included in texts for Korean study that focus on conversational skills. This allows for the making of suitable conversational passages for more complex points of linguistic cultures that cannot be expressed in text alone as the learner's level of Korean rises. On the other hand, introducing the general culture in the text for

Korean study can effectively educate students about culture. When there is a necessity to address cultural questions outside of the text, they can be answered through a suitable conversation or an appropriate composition. It will allow for an effective cultural education in which the learner can experience another culture at a high level.